

清水 かわり

建築設計製図Ⅱ

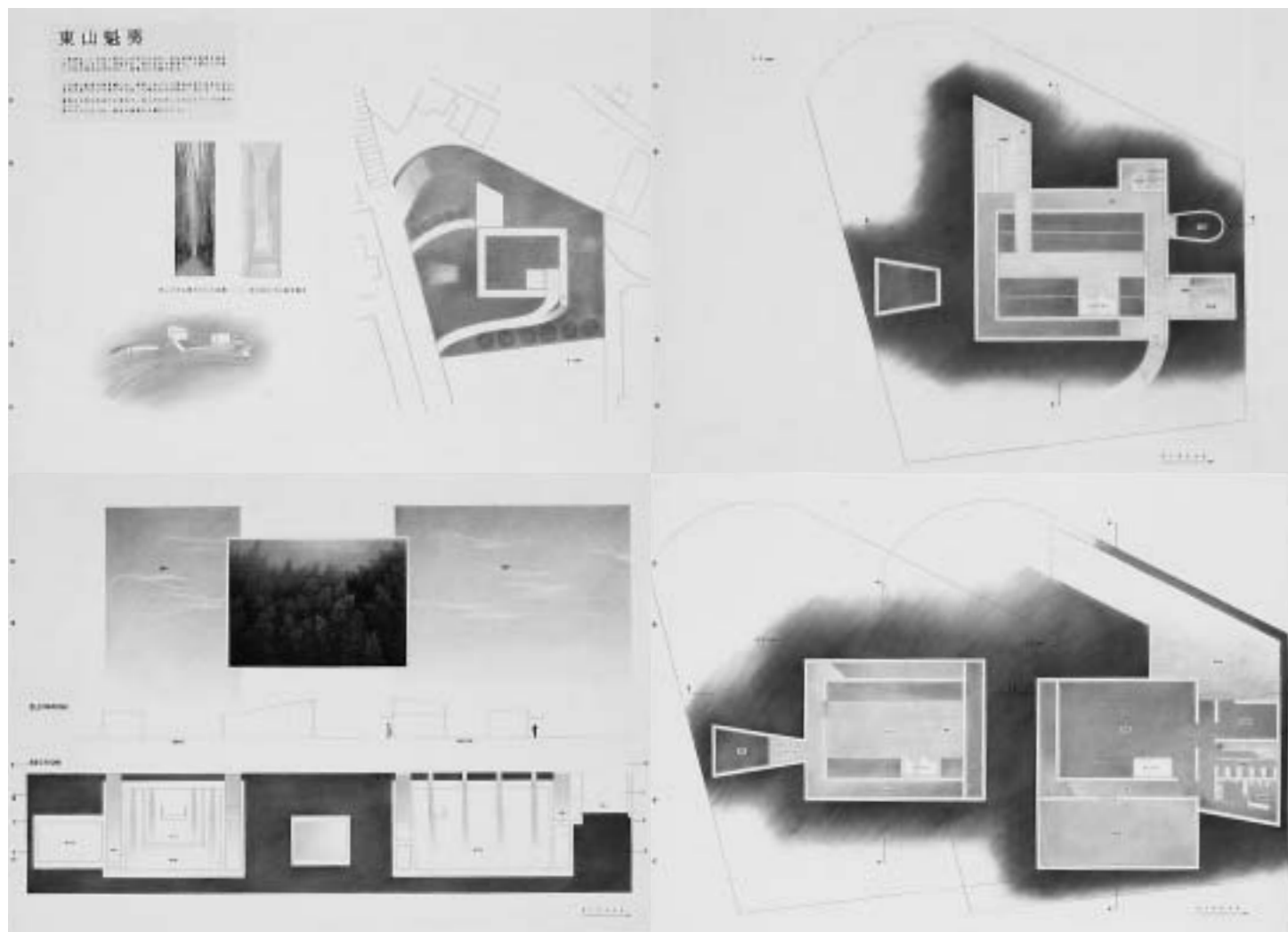
第2課題
個人記念ギャラリー

2年1組

- 担当＝
 若色 峰郎
 片桐 正夫
 野村 欽
 小川 守之
 白井 勇
 曾我部 昌史
 染谷 正弘

清水 かわり

線のギャラリーは1つのものを様々な視点から見るためのギャラリーなので、主として展示する彫刻は2つとし、1つが見えているときには他方は全く見えないようにした。敷地の中央に近い所に展示する2本の曲線の彫刻は見る人が上下することによる視点の変化と見る場所による角度の変化を、南側の水の壁と一番大きな壁に囲まれた池の



部分に展示するうずを巻いた彫刻は地上と地下の2つの視点の変化を見られるようにした。

指導=曾我部 昌史

外構を積極的に計画に組み込んでいる提案となることを期待して、屋外展示が可能な作家を選ぶこと、そして外部を含めた敷地全体を一つの建物としてとらえることを、当班共通の条件として課題に加えている。

この作品では、これらの追加された設計条件を逆にとらえたのか、追加された設計条件だけを元に建築化が試みられているかのようだ。具体的には、屋外に配置された2つの彫刻を取り囲むように、スロープ状の

見学通路が敷地いっばいに巡り、こうしてつくられた床を屋根として屋内部分が生み出される。さらに屋内部分は地下へと下り、作家紹介のための展示スペースとなる。カフェ、ミュージアムショップなどが地下の展示スペースと連続して設けられるが、北側に向かって低くなる敷地形状やサンクンガーデンを生かし、外光が取り入れられる。その結果、高低差を含めた敷地全体が一つの建物であるかのような建築が生み出された。

高橋 亜希子

最初好きな建築家・芸術家ということで、2人の人物を簡単に

選びました。

儂さや脆さ、うつろい易さによって時間を迎っていく様な素材の扱い方をする妹島和世と、「風景はいわば人間の心の祈りである」という風景観を持つ東山魁夷の2人を何故選んだのか、2人にどんな共通点があったのか、又その共通点を感じとった私自身の中には何かあるのかを、自分で探していく様な取り組みでした。

指導=染谷 正弘

誰の芸術作品を展示するギャラリーにするか、つまりひとりの芸術家を選択することからこの課題はスタートします。そして、選ばれた芸術作品固有の展示空

間プログラムが組み立てられ設計スタディはすすめられます。僕のクラスでは、芸術家だけでなく好きな建築家をもひとり最初に選んでもらいました。それは、ただひたすら好きだという自分好みの建築空間を、自らの感性をより所に見極めて欲しかったからです。これからの建築設計におおいに役立つはず

です。自らの感性を振り所に選んだ芸術家の作品と建築家の建築空間には、共通する〈何か〉があるはず。それは選んだ本人だけの〈何か〉かもしれませんが。この課題を通し、その〈何か〉をクローズアップし、設計スタディに反映させることが何

よりも大切なことだと僕は考えました。その結果である自らの提出作品は、客体化された自らの感性そのものなのですから。

高橋さんは、画家・東山魁夷、建築家・妹島和世を選んでいますが、二人の作家の作風に「静謐」という共通項を見出したようです。ギャラリー全体を地下に埋没させ、地上である敷地全体を緑(植栽)で覆っています。それにしてもこの作品のドローイングはすばらしいと思います。彼女のドローイングテクニックのレベルの高さもさることながら、「静謐」な空間が作品全体にみごとに表現されています。